

安部公房『燃えつきた地図』論

——作品内の読者、小説の読者、および同時代の読者をめぐって——

波瀾 剛

はじめに

安部公房の長編小説『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』は失踪三部作と呼ばれている。その第三作に当たる『燃えつきた地図』は、一人の男の失踪を追跡していた私立探偵自身が失踪してしまふ、という小説である。

三部作の前二作が発表された一九六二年（昭和三七）、六四年と比べると、この小説の刊行された一九六七年は、当時の社会現象が「失踪」という作品の主題とかなり密接に関わっているように見える。というのも、この年は、「蒸発」という表現が活字媒体に定着し始めた年でもあり、東京においては、流出人口が流入人口を上回り、都市人口の様態の変容が確認された年でもあるからだ（1）。

こうした状況を反映し、作品世界に描かれる「失踪者」は、いわゆる蒸発者や失踪者にとどまらず、家出少年、行方不明者、自殺者など、様々な形態をとって作品に登場する。登場人物に関するこのような設定は、『砂の女』と『他人の顔』に登場していた失踪者とは、だいぶ異なる印象を読者に与えている。すなわち、作品世界に登場する人物が次々と社会から逃亡（逃避）してゆくというような設定は、それまでにはみられなかったものである。

しかも、登場人物の設定に限らず、形式の面から『燃えつきた地図』を考えると、さらなる問題が浮かび上がってくる。すなわちこの作品には読者の読書行為をたびたび中断するような突然の場面転換や、本文以外の文書あるいは図形（興信所の報告書、地図のメモ、新聞記事など）の挿入がみられる。そのためであろう、大岡昇平氏は「退屈さが伴う」と非難めいた意見を述べ（2）、篠田一士氏も「肝心のドラマそのもののありかが判然としない」と評しているほどである（3）。

確かに、出来事の展開に重きを置くとすれば、こうした見解が生ずるのは当然のことであろう。しかし見方を変えると、展開がはつきりしないという指摘は、この小説の固有の構造を浮かび上がらせるヒントともなる。なぜなら、緩慢な展開は、視点人物の自己同一性が崩壊する過程の描写であり、異文書の混入は、いやおうなしに読者を作品内部に介在させるといった小説の仕掛け、あるいは構造をうかがわせてくれるからだ。ただこれらの問題は、本論の展開にゆだねることにしよう。

以上の筋立てに対する不満論とは別に、この作品に関しては、イメージ論が注目される。これは、登場人物と、その人物に関連づけられる色や空間のイメージとの結合を捉えようとする論である。前田愛氏(4)とウイリアム・カリー氏(5)は、作中の依頼人女性の性のイメージを部屋という空間と結びつける。両氏によれば、その女性に対する主人公の性の欲望は、「団地」の部屋という空間、あるいはその部屋にかかるカーテンから喚起されるという。このようなイメージ論と方法を同じくしながらも、鶴田欣也氏の場合には、「団地」の空間的イメージ等から、都市における「流動」と「定着」という二つの対概念を読みとろうとする(6)。この考察も興味深いものではあるが、ここでは省略に従わせていた。また、これらとは別な視座からなされた、注意すべき先行研究としては、中山真彦氏の論文が挙げられる。氏は、公房の作品群をフランス語訳と対照して、主人公である興信所調査員の書く報告書が調査員の心情を裏切るものになっていると指摘している(7)。これは、大岡、篠田の両氏の指摘を文体の面から捉えなおしたもので、文章様式の多様性とおして、作品の構造を追究する糸口となり得るであろう。

本稿の筆者は、これらの先行研究が据えている視点を、本文中に挿入されている地図あるいは新聞記事(切り抜きの縮刷)などにもおし広げて考察したいと思っている。そうする理由は二つある。まず第一に、本文に挿入されたいくつかの地図や新聞記事が抱えている情報は、この作品が三部作の他の二作品との相違点を検討する上で、重要な問題を提起すると考えるからだ。そして第二には、それらの地図や新聞記事が読み手の位置の問題を抱えていることによる。つまり、登場人物が複数の文章を提示するとき、それを読ませる対象には、一方に作品内の登場人物と、他方に作品を読む読者といった、二つの方向性が生じている。この二種類の読者は当然区別されるべきであり、このことによって、二種の「読む」行為の相互関係が理解されることになろう。

そこで、本稿ではまず、地図や新聞記事を用いて表象された部分をも含めて、テキストの読みを進める。そのうえで、

本作品が三部作においてどのような位置を占めるのか、また、「失踪」という主題が抱えている公房作品の問題がどこにあるのか、この両面にわたって考察を進めてゆくことにする。

一、『燃えつきた地図』における「失踪」の枠組み

『燃えつきた地図』は失踪人に関する依頼調査書が提出されることで話が始まっている。その依頼事項というのは、根室洋という失踪人の捜索である。失踪人から連絡を絶たれた妻、根室波瑠がその依頼人である。この依頼によって、この小説の視点人物となる調査員が調査を開始する。

こうして一枚の依頼書が冒頭場面へと移行する。ただし、この冒頭場面は以後のプロットの伏線ともなる。主人公である調査員は、失踪人に関わった人々との出会いを重ねてゆくうち、やがて、自らも失踪者となる決意を抱く。そのとき、この冒頭の場面が再び繰り返されるのである。このように、循環の様相を呈する行動の過程がこの作品の筋立だと言えるだろう。

自らが失踪者となるまでに、興信所調査員（名前は無い）が会う人物は多い。依頼人である根室洋の妻、その弟、根室洋の職場の上司、部下、取引先の人物など、『他人の顔』の登場人物などに比べればかなり多数におよぶ。これらの登場人物には、それぞれ個性が感じられるとともに、各自がそれぞれなりの問題を抱えていて興味を持てる。だが、「失踪」という問題を考える際に注目すべきなのは、公房が意図的に使い分けている語彙と登場人物との関係である。本稿ではこの関係から考察してゆくことにする。

まず、興信所の調査員（以後は探偵と呼ぶことにする）が、根室洋を「失踪」人と呼んでいることに注意しなければならぬ。というのは、他の登場人物が根室洋を「失踪」者として呼ぶ機会は、全篇を通じて二回だけで、この探偵の使用頻度とはくらべものにならないからである。次に「家出」という言葉には、二通りの使用法が見られる。会話中に見られる場合（探偵と波瑠、探偵と波瑠の弟、探偵とその妻）と、男色家の波瑠の弟がどこからか集めてきた「家出少年」たちを指す場合とがそれである。それから「行方不明」という言葉が会話で多く用いられる。たとえば、根室洋の職場の部下太田と探偵との会話、探偵が立ち寄るF町における出稼ぎ労働者たちの会話、依頼人（波瑠）と探偵との会話、などが挙

げられる。また、本稿の視座にとつて重要な事実となる「蒸発」という語が、縮小転写の上挿入されている新聞記事に見られることも注意しておいてよからう。

はたして、この使い分けが登場人物とどのように関わっているのだろうか。「失踪」という語は民法で規定するところの「失踪者」にもとづいて、探偵も、その用法に従っているように見える(8)。このことは、別な角度から見た場合からもうなずける。というのも、探偵が法律になじみのない人物と話すときには、「家出」「行方不明」といった類似の日常語を使用するからである。こうした法律用語と日常語との使い分けから気になるのは、興信所調査員、すなわち私立探偵という主人公の設定状況である。ただ、この問題は、本稿の論述の都合から後に触れようと思う。

次の「家出」の場合は、それがいわば小説の仕掛けとなつて、小説の展開とともに探偵自身が失踪者であることを自認させるきっかけとなる言葉である。この言葉は、出来事が進行する過程で、探偵とその妻との別居関係を根室洋と妻、波瑠との別離の關係に結びつける。そのことによつて、探偵は、やがて「家出」が他人ごとでなくなるまでに追いつめられることになる。

その場面を参照しておこう。探偵は、調査期間中、久しぶりに妻の経営する店を訪ね、「ぼくらが別れなければならなかった、本当の理由は、いったい何だったんだろうね。」(一六六頁)と、その原因を妻に問いかける。しかし、妻にもその原因が分かりかねているのか、決定的な解決を見ない会話がしばらく続く。そのうち、妻は突然その原因を発見したかのように、彼に向かつて、「分つたわ、あなたは家出をしたのよ、逃げ出したのよ。」(一六九頁)と口走る。この答えにもならない答えを聞いて、彼は「妙な狼狽を感じ」る。

この探偵の狼狽は、周囲の人間が根室洋に対して「家出」したと断定した時の状況と、彼自身の置かれている現在の状況とが酷似しているために起こつたのだが、探偵は自分自身ではその状況を認めたくない。しかし、探偵も「家出」中の根室同様、いったん勤め先をやめて、そのうえで妻から離れた経歴を持つ。仕事を变えた途端に家を離れたと言う事實は、妻から見れば、夫の現実逃避としか見えない。そのため、探偵の妻が彼に向かつて「家出」したと言うことには、妥当な根拠がある。しかし、探偵がそれを認めるようになるのは、妻の口走つたこの「家出」という言葉に重みを感じたからだと考えられる。この言葉によつて、探偵はあらためて彼と妻との現状を考えさせられるのである。そして、探偵は、既に「家出」した根室洋の状況を想像する。その結果、どこかに生きているはずなのに、どんなに追跡しても痕跡さえつ

かめない人間の有様、すなわち「失踪」状況を予感し、それを心の中に大きく膨らませてゆく。「家出」という言葉は、出来事の展開とともにその効果を發揮してゆくのである。

なお、この言葉に関しては、前述の例以外に、「家出少年」を指す場合もある。この小説で「家出少年」という場合、それは、農村から都会にあこがれて家出する少年たちを指す。この「家出」現象は、「蒸発」が当時の流行語であったことと呼応していると思われる。ただしこれについても、新聞記事という観点を踏まえて、後に触れようと思う。

その次の「行方不明」になると、その多くが会話で用いられるということもあつて、指示する対象はやや曖昧になる。例を挙げてゆくと、

- 1 「よして下さいよ、行方不明をさがしている人間が、また行方不明なんていうんじゃないや、まるで馳(ご)っこじゃないですか。」(探偵) 一五頁
- 2 「弟は行方不明じゃないわ。」(波瑠) 一五頁
- 3 「だって、課長の行方不明じゃ、ほくも被害者の一人なんだし」(根室洋の部下田代) 五八頁
- 4 わしは、おめえ、行方不明人調査願いに、名前が乗つかつとるんだよ、かかあの奴が、役場に、願いを出して、綜合指名手配なんだとよお……(F町の出稼ぎ労働者) 一一五頁
- 5 「行方不明の人間が、八万人以上もいるんですってね。驚いたなあ。根室課長のことも、べつに例外ってわけじゃなかったんだ。」(田代) 二一四頁
- 6 「この辺を、せっせと歩いている連中だって、考えてみれば、一時的な行方不明人みたいなものだな。一生か、数時間かの、ちがいがあただけで……」(田代) 二二七頁

引用の後に()で示したのが発言者である。ここからも、発言者は多様であることがうかがえる。「行方不明者」の対象は、根室洋から、波瑠の弟、出稼ぎ労働者、年間八万にも及ぶ蒸発者、根室の部下田代、路上を歩く人々へと拡張される。「行方不明」なる概念が根室洋から他の登場人物へと拡張してゆくと、作品世界においては、「行方不明」者の烙印を免れる人物が次々に消えてゆく。つまり、「行方不明」者の拡大は、「失踪」が作品世界において日常性を獲得する事態を惹起する。

このように見てくると、この小説にあつては、「失踪」にかかわる語が少なくとも三つの次元で使い分けられていることが理解されよう。すなわち第一のレベルとして、「失踪」ないし「家出」の語は、主人公の興信所調査員である「ぼく」が、自己の状況を認識するときにその転機を知らせる筋立上の重要な仕掛けとなつてゐること。第二のレベルとしては、「家出」に「少年」が介在する場合で、「蒸発」という語とともに、一九六〇年代の社会現象と結びつき、同時代の読者に切実な問題を喚起させたこと。そして第三のレベルとしては、「行方不明」という語が作品世界全体に押し広げられてゆくことで、日常化する「失踪者」の世界を形作つてゐること、この三点である。

そこで次節からはこの三つのレベルをふまえて、①登場人物の相互の間、②作品世界と読者、③同時代言語と同時代読者、とに分けつつ「失踪者」の問題を考へてゆこうと思ふ。

二、「ぼく」の存在証明

まず、登場人物間相互における「失踪者」の問題に入つてゆくために、前もつて主人公の「ぼく」という人物から考察を始めようと思ふ。

作品世界内の現在は一九六七年（昭和四二）二月の東京である。興信所の調査員である「ぼく」は、根室波瑠からその夫の洋の行方調査の依頼を受けたことをきっかけとして調査を開始する。だが、一週間の調査期間のうちに、自分自身が「失踪者」となつてしまふ。

「ぼく」自身が現実の生活から離脱した自己を意識するまでの変化は、「失踪者」を仕事柄必要とする興信所調査員、すなわち探偵という職業設定に関係している。探偵という職業は、依頼人から要求された仕事をこなして、希望通りの報告書を作成する専門的なものとして描写される。その専門性がときに犯罪の加害者に手を貸すようなスリルのある仕事となる場合もある。ところが、四年半も続けてきたこの仕事は、ある一件の依頼がきっかけとなつて、ご破算になつてしまふ。もつともこの破綻がたつた一つの原因に由来するとは思わないが、その原因をうかがわせるものとして、調査期間中の「ぼく」とその妻とのやりとりには注意すべきものがある。

読者にとっては、作品世界の内部において、探偵になる前の「ぼく」のことを知る機会が少ない。しかし、妻との会話

から、「ぼく」がこの職業に就いたのは、前の会社を辞め妻と別居するようになってからだということが理解できる。調査の二日目、「ぼく」は妻との不和の原因について聞くという名目で、自分の妻の経営する洋裁店を訪れる。会話の一部はすでに引用した。とは言え、参考のために妻の唐突な切り出しをあらためて引用すると、妻は、「ぼく」に向かって、「ぼく」が「際限のない競争」から「逃げ出した」いから、前の会社を辞め、家を飛び出し「私立探偵なんていう、裏通り専門の覗き屋」になったと責める（一七〇頁）。この言葉に、「ぼく」は、「ひりひりとした屈辱」を感じる。そして、それを境に「ぼく」の職務遂行が不安定になってゆく。

妻とのやりとりの直後、妻の指弾を素直に認めることのできない「ぼく」は、興信所に戻って上司に会わねばならない約束を破つてもしまし、依頼人波瑠への連絡をすっぱかしてもしまし。そして、「ぼく」はいつの間にか高速道路を突っ走っている。

これは道路ではなくて、流れる時間の帯である……（略）純粋な時間……目的のない、時間の消費……なんとこの贅沢さ……アクセルをいっばいに踏み込む……速度計の針が徐々に上つて、九十六キロを指す……風にハンドルを取られはじめ……緊張感で、ぼくはほとんど点のようになる……厝に出てないある日、地図にのっていない何処かで、ふと目を覚ましたような感じ……この充足を、どうしても脱走と呼びたいなら、勝手に呼ぶがいい

（一七二—一七三頁）

「ぼく」は車をやみくもに走らせることのうちに充足感を見出だしている。その充足感は現実から「脱走」したいという欲望を「ぼく」の内部に顕在化させる。と同時に、その充実感、周囲の者が「ぼく」を現実逃避した人間だと呼ぶことさえ厭わないと開き直りを起こさせるほど、「ぼく」の心に満足を与えている。

ところで、「自動車」は探偵が都内を移動する際、常に利用する道具である。時にタクシーを利用することもあるが、それ以外「ぼく」は、ほとんど自分の車を使用している。そして「ぼく」の探偵らしさを発揮させているのもこの「自動車」である。

自分の「自動車」に乗る「ぼく」には、この高速道路の体験まで、探偵としての自信が備わっていた。波瑠の住む団地に掲げられた「許可なく団地内に車の乗り入れを禁ず」（五頁）とか、「立入り禁止、駐車禁止」（七頁）というすべての警

告を無視して、「ぼく」が波瑠のもとに向かうことができるのは、自分の「自動車」に乗るときだけであった。タクシード同じ場所に向かうときや、歩いて団地に入ろうとするときには、その思いきりの良さはない。さらに、波瑠の弟が殺害されたときに急場を逃げ切ったり、あるいは図書館にいた女子学生をからかうことができたのも、「自動車」という、探偵取りを可能にした私的な移動空間に原因する。そのような「ぼく」の行動から見ると、妻との別居や退職によって崩壊しかけている「ぼく」の自我が保たれているのは、自分の「自動車」に乗り込んでいる時だけのようだ。つまり、彼は「自動車」という鎧をつけて探偵というアイデンティティを保ち、その小さな支えだけでもって「ぼく」という自我を維持していた。

ところがそれも、妻の一言に狼狽した日から変化を見せるようになる。というのも、探偵稼業も人生の逃げ場でしかないという妻の指摘が、「ぼく」という存在に唯一残された社会的なつながりをも剝奪してしまったからだ。「ぼく」と妻の関係、すなわちそれまでの夫婦の役割は、妻の出世によって逆転していた。しかもさらに悪いことには、会社の出世競争に嫌気がさした「ぼく」の逃亡衝動がその逆転した関係を助長した。その追い詰められた意識につき動かされて社会につなぎ止めることができた。ところがいま、自分の行為を「家出した」と断定する妻によって、「ぼく」はまたしても精神的な逃げ場を奪われてしまった。

そのためにこの後では、「ぼく」の「自動車」の役割も変わらざるを得ない。「ぼく」の「自動車」は、これ以後探偵らしさを演出することが不可能になってゆく。終始「ぼく」の探偵意識を支えてきた「自動車」は、タクシード運転手達に暴行を受け、無理矢理押し込まれる事態を招いたりして、惨めな空間に変わってしまう。こうして、「ぼく」の存在を支えきれなくなった「自動車」は、いつしか「ぼく」の意識から排除されてしまう。

こうした状況の変化は、はげ口を求めて意識下に抑圧されていた波瑠に対する「ぼく」の欲望を解放する。妻と会ったその夜、団地のアパートの近くまで来た「ぼく」は、それまで波瑠の部屋に掛かっていた「レモン色のカーテン」が「白と焦茶の、縦縞のカーテン」に変わったのを見る（二五一頁）。すでにカーテンから波瑠の心とその肢体を連想するようになっていた「ぼく」は、それを「ぼく」に対する彼女の変化と考える。その結果、失踪していた夫の洋が帰宅したと合点する。そこで「ぼく」は、さらに想念を進めて二人（「ぼく」と波瑠）の関係の終焉を予想する。そのとき、調査の結果を

記す「報告書」は、彼女に言い寄る手段からただの紙切れに変わってしまった。

この「報告書」の問題は、中山眞彦氏も指摘するように(9)、出来事の核心に触れないように書かれてゆく「報告書」と、事件の真相をつかもうとする「ぼく」の意志とが矛盾を見せずにすむのは、それが「ぼく」と波瑠との会話の素材となる限りにおいてであった。したがって、「報告書」という文書も、波瑠に近づく口実がなくなる時点で「ぼく」にとつてその意義を失う。そして、探偵として気安く使用されてきた「失踪」という言葉が以後「ぼく」の口から出なくなる。

その後、「ぼく」は田代の自殺が興信所に波及しないようにするため興信所を辞める。これで身軽になった「ぼく」は、ふたたび欲望のままに波瑠のもとを訪れる。こうして依頼人と調査員という関係が崩れ、波瑠のアパートは性的欲望の空間へと変貌する。しかし、自分の状況を理解すればするほど、「ぼく」の内部には、「失踪」したいというの欲望が高まってゆく。

現状から逃げ出そうとする「ぼく」は、厳然として存在する社会に対する未練があったからこそ、かろうじて興信所の調査員という役割をつとめてきた。しかし、その均衡が崩れてしまふや、「ぼく」はその役割を放棄し、新たに波瑠を逃避衝動のはけ口として選んだのであった。ただし、そのことがかえって自己への反発を引き起こし、結局はその彼女からも離れてゆくようになる。それはなぜか。「ぼく」の行動について、今度は、波瑠の側に焦点をあてて検討してみよう。

三、「団地」に住む波瑠という女性

根室洋の妻である波瑠は、探偵の「ぼく」に夫の洋の「失踪」に関する調査を依頼する。しかし、「ぼく」は結果的に根室洋と出会うことはない。そのため、調査にかかわる小説の叙述は、おもに波瑠との接触とおしておこなわれている。この叙述の必然として、波瑠の住む団地が、作品世界の中心的な場を占める。そのため、この小説にとって団地がいかなる意味をもっているのかについては、従来から注目が集まっていた。

たとえば鶴田欣也氏は、団地内の彼女の部屋に着目し、それが「子宮」の隠喩であるという解釈をみせている(10)。この解釈に基づいて、氏は「アパートが子宮を象徴しているとすると、そしてもし根室の妻が動きの停止を代表しているのなら、アパートと彼女の複合体は逆行の終点、すなわちそれ以上は戻ることが出来ない行き止りを暗示しているよう」だ

と結論づけている。この見解の枠組みは、「失踪」の主題に託された「流動」のイメージに対立する「定着」のそれの一つであるという対概念を媒介にしていることが見てとれる。それを受けてであろうか、前田愛氏は彼女のアパートの窓にかかる「レモン色のカーテン」を「若妻の皮膚の暗喩であり、探偵の「ぼく」にとっては性的な欲望のシンボルなのである」と述べて、アパートを「エロスの空間」と呼ぶ。そして、それこそが疎外状況を克服するための「失踪」を妨げる「偽の共同体」空間であると説明している。なお同氏は別に、「団地について「冒頭に描きだされた抽象的、幾何学的な団地風景は、後藤明生の団地小説がとりあげることになる細密な空間の主題を予告したデッサン」とも述べていることを付言しておきたい。(11)

これらの見解には稿者も同感であり、それ以上のなんらかの説明を加える必要は感じられない。ただ、「団地」を都市化の現象の一つとして捉え、「波瑠」という女性をその空間と切り離して考えるとき、右にあげた見解とは異なる見方も可能になってくるのではなからうか。その点で注意したいのは、この作品世界に、もうひとつの「団地」が存在するという事実である。その「団地」は探偵が根室洋の手がかりを求めて訪ねた「F町」の「二丁目」である。この「F町」については、探偵が波瑠あての報告書に手書きの地図を添えて(七六頁)、以下のように記している。

事務所を出発、F町にむかう。(略)甲州街道経由。(略)道路をへだてた西側一帯が、すでにF町三丁目であるとのこと。私の地図(前年度発行)に出ているF村には、そんな丁目の区別などないし、道路の位置関係なども、かなりの相違が感じられる。聞けば、現在建設中の高速道路のインターチェンジが、この近くに来ることが決定され、以来宅地造成や、土地の売買が活発化し、町村合併運動が実を結んで、現在のF町に拡張されたもの由。(七五―七六頁)

この報告によれば、「F町」は高度経済成長期のさなか、郊外の発展にともなって変貌を遂げつつあったことが分かる。この町には、付載された地図から見て、南北に走る川が走っている。さらに叙述を詳しくたどると、当時、この町は都心から「甲州街道経由」の郊外にあって、「建設中の高速道路のインターチェンジが、この近くに来ることが決定され」ていたとある。そこでこれらの事実を勘案すると、川沿いのこのF町は実際には調布市あるいは府中市のいずれかに限定できる(12)。また、自筆原稿から、甲州街道から鎌倉方面へという方向性が理解できる(13)。さらに、さきほどの記述を

読み進めると、都内では最初に町村合併が行われ「町村合併運動が実を結んで」いたという事実が知られる(14)。そこで前の事実と照合すると、付載された地図が指し示す地形は、府中市中河原町周辺(現在の南町、住吉町)の地形ではないかと思われる(15)。

ただし、この手書きの地図は、あくまで虚構の産物であって、現実の地形と一致しない。そして、それは「ぼく」の作成した波瑠用の見取り図にすぎない。ただ、波瑠にとって既知の場所である「F町」が、ここまで前面に出てくるのはなぜだろうか。

「報告書」は、場合によっては、登場人物の間で取り交わされたと記すだけでその役割を十分に果たし得る。しかし、わざわざその内容が文章としてテキストの内部に転写されることで、「ぼく」の矛盾した心の動きが読者に伝わるようになる。これは既に述べた通りである。とすれば、「報告書」の一部であるこの地図も、「ぼく」の文章同様に考えてよいのではないだろうか。筋をたどれば、「ぼく」が地図を描くとき、波瑠が「F町」を知らないことを前提としていたことは疑いもない。しかし、こうした説明よりも、むしろこの地図は(波瑠と区別される)一般の読者へと向かっているものだと思えた方が説得力があるのではないだろうか。

地図のモデルが調布市中河原の地形だと判断するのは、さきほど指摘した事実と、公房が、当時、その土地を經由して多摩地区へと向かう街道をドライブコースとしていたという理由をあげてもよからう(16)。とすれば、公房は宅地開発の様子をつぶさに観察できたにちがあるまい。しかし、先ほども指摘したように、その地図は厳密には実際の地形と一致せず、架空の「F町」としか表記されない。しかし、これによって読者は、そこが東京郊外のどこかという印象を与えられる。換言すると、その土地は中河原の地形であることよりも、変貌しつつある郊外の町であるという理解が望まれている。

虚構の「F町」は、都市が拡大しつつあるなかで、内部における既存の物理的風景や社会関係が変貌させられつつあるどこかの町である。このことは、この町の描写のなかに見られる(F町の「一、三丁目」の田舎町の風景と、飯場の出稼ぎ労働者が団地を造成中の「二丁目」との対照から明確になる。小説の叙述によれば、「二丁目の飯場が出来てから」は「街の方が」押し寄せてきたために(八四頁)、「昔の名残りを、まだ一応はとどめ」る「旧F町のメインストリート」はさびれていくばかりだという(八〇頁)。この対照的な位置関係は、地図による各地区の境界線から読者にも了解される。

だが、その説明は本来登場人物間においては必要とされてはいない。しかし、この地図と文章（「報告書」）によって、その關係を知った読者にとっては、發展する都市が既存の「F町」を解体することによって生まれることを明確にみてとれるのである。このことから、地図が文章中に存在する目的は、それが作中人物ではなく、やはり読者に対するメッセージのためではないかと思われるのである。つまり、郊外の変貌を強いることによって展開される都市化といった構図は、作品世界の内側にとどまらず、外側の読者にとっても重要な前提とされているといつてよからう。

こうした郊外の変貌ぶりは、「M燃料店」のジレンマからも具体的に理解できる。失踪人である根室洋は、「大燃商事」という会社で「販売拡張課長」をしていた。その彼は失踪直前に「F町」の「M燃料店」に行くことになっていた。この「M燃料店」の扱うプロパンガスについて、探偵は次のように述べる。

住宅地が郊外にむかってひろがるにつれ、炭屋もプロパンガスのおかげで、商売をひろげていき、人口が増えれば増えるほど、繁盛し、だが、成長した爬虫類が、けっきょくは哺乳類に、道をゆずらざるを得なかったように、いずれ都市ガスにあふら（検査者）げをさらわれてしまうのだ。都市の成長によって、誕生し、都市の成長によって、死滅する、なんという皮肉な商売だろう（八〇―八一頁）

これは「大燃商事」の人間や「F町」の住人の意見でもある。彼らの見る限り、都市化によって、郊外に住む人間も確かに恩恵を受けるものの、それはあくまでもその過渡期における恩恵にすぎない。しかも、まったくの都市的状況が現出するならば、自らを根底から変化させざるを得ないジレンマを突きつけられることになる。このように、「団地」という要素は、既存の村落の解体を基に存在する空間として、その重要性を帯びている。

ところで、波瑠という女性をその人物設定から見ると、やはり注目すべき特徴が見つかる。それは彼女が内面に築き上げている「家族」の幻影である。彼女は身辺に存在しない夫の代償として想像上の夫を生みだす。そして、その幻影とともに、自己の内面に家族という架空の絆を作り上げ、現実逃避を実現させる。その結果、架空の会話（独り言）によって夫婦生活が成立している。このように、彼女には現実存在するかどうかに関わることなく、家族の絆を任意に創造できる性格を見ることができ、弟の死後、彼女について、「ぼく」も次のように考えている点を指摘しておこう。

彼女は、その愛する弟を、生きてるときから死人として、存在しないものとして、考えてきたのではあるまいか。(略)歩いて十分もかからない、高台のすぐ下で、ちょうど出棺が行われていただろう、その同じ時刻に、あれほど弟のことを話題にのぼせながら、涙一滴見せようとしなかった理由も、分るような気がする。空想と、独り言で、あふれそうになっている客間に、死人が一人くらい仲間入りしたって、べつにあらたまる必要もないわけだ。すると、失踪した「彼」に対しても：(二二五頁)

ここで言う「彼」は根室洋である。言いさしの「…」で終わってしまう部分は、当然「生きてるときから死人として、存在しないものとして、考えてきたのであるまいか」という推測が繰り返されているのであろう。「ぼく」との接触の際にも見られるのだが、彼女は他人の発言を無視するほどに独り言が多い。時に幻想の夫にくすぐられていると感じてカーテンにカーヒールをこぼしてしまふほどに、彼女は内的世界に拘束されている。「団地」という空間において彼女ができることといえば、すでに崩壊しつつある家族という聖域を内面に維持し続けることか、それとも誰かその聖域を信じる人間が現れるのを待つことか、といった程度にすぎない。探偵である「ぼく」に対して波瑠が親密に振る舞うのもこのような理由によるのである。

この親密さが「ぼく」を波瑠へと向かわせる要因となった。しかし、やがてはそこから逃げ出してしまふ「ぼく」。そこに、都市化に対する妻や波瑠、波瑠の弟の反応とは異なる「ぼく」や、あるいは根室洋の姿勢を読み取る必要がある。

四、「道路」の意義

前節でも触れたように、妻から再び離れ、職を放棄した「ぼく」は、波瑠の所にいったんは逃げ込んだにもかかわらず、結局、彼女を電話ボックスに置き去りにして「失踪」する。ただし、この結末をどう読むべきかということについては、あらかじめ一つの前提が必要となる。その前提とは、記憶喪失的狀況にある「ぼく」の描写における女性が波瑠であるとする、読み手の側の判断である。その前提を読者に受け入れさせるのが、以下に引用する二つの描写にちがいはない。

クラッチを踏んで、ギアを低速に入れかえる。二十馬力の軽自動車には、この勾配は、いささか負担が大きすぎた。

道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう。十センチほどの間隔で細いみぞが刻んである。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。せつかくざらつかせたコンクリートの面も、ほこりや、タイヤの削り屑などで、すっかり目をつぶされてしまい、雨の日にゴム底の古靴だったりしたら、さぞかし歩きにくいことだろう。これは多分、自動車のために考慮しての舗装なのだ。十センチごとの目地の刻みも、車のためなら、あんがい役に立つかもしれない。融けなかった、雪やみぞれが、道路の水はけを悪くしているようなとき、水分を側溝に誘導してやるのなら、なんとか効果も期待できそうである。(冒頭部)

四頁

そこでぼくは、ゆっくりと立ちどまる。空気のバネに押しもどされたように、立ちどまる。左足の爪先から、右足の踵にうつしかけた重心が、また逆流してきて、左の膝のあたりにずしりと重みをかける。道の勾配がかなり急だからだ。

道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう。十センチほどの間隔で細いみぞが刻んである。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。それに、せつかくざらつかせたコンクリートの面も、ほこりの沈殿物や、自動車のタイヤの削り屑などで、すっかり目をつぶされてしまい、雨の日にゴム底の古靴だったりしたら、さぞかし歩きにくいことだろう。これは多分、自動車のために考慮しての舗装なのだ。十センチごとの目地の刻みも、車のためなら、あんがい役に立つかもしれない。なにか融けなかった、雪やみぞれが、道路の水はけを悪くしているようなとき、水分を側溝に誘導してやるのなら、かなりの効果が期待できそうである。(結末部)

二七四頁

ここに引用した二つの文章は、この小説の冒頭部と結末部である。この両者は筋が循環し反復されているような感を与えると言つてよからう。作品世界においては、結末部直前の場面転換以後、一度も具体的な名を持つ存在が登場しない。そのなか、過去の記憶を失った登場人物の「ぼく」と、かつて調査員であった「ぼく」とが同一人物だと読者に思わせるのは、この場面の類似の確認によつてである。(ただ、この同一人物の認定は、「ぼく」の持ち物から確実なものになつてゆくことを付言しておこう)。

そのうえで二つの描写を見比べていくと、場面の記述のうちに、「失踪」する者の意識の変化を読みとることができ、まず相互の違いに注目すると、坂道を上っていく手段の違いが挙げられよう。冒頭部で、「ぼく」は自分の自動車に乗っている。その一方、結末部では、歩いて坂を上っている。そして、自動車では一気に団地へと進んでいくのに対して、歩いて行く「ぼく」は、坂の途中で何度も「立ち止まる」。そのため二つの描写は、通過する速度の違いに応じて、「ほこり」

から「ほこりの沈殿物」に、また「融けかかった、雪やみぞれ」から「なかば融けかかった、雪やみぞれ」にと物質的狀況を描き分けるように表現されている。

しかし、自動車と徒歩といった条件の違いは、むしろ文章上の類似点にそれぞれの特徴を生かしている。その点を、引用文中から指摘すると、たとえば「歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない」と「これは多分、自動車のためを考慮しての舗装なのだ」の二ヶ所が挙げられる。この二ヶ所に登場する「歩行者」と「自動車」のもつ役割は、「ぼく」が「自動車」に乗るときと、歩いて坂を上るときとで逆転する。つまり、冒頭部では、坂道の道路が「自動車」で走る「ぼく」のために存在していたが、結末部では、同じ道路につけられた自動車のための溝が、徒歩で上る「ぼく」の邪魔をしている。この役割の逆転は、この坂の先に続いている波留の「団地」を考慮するとき、重要な意味を帯びてくる。

この「団地」はそこで家庭生活を営む都市生活者の帰る場所である。この小説の表現によれば、そこに住まう誰もが帰って、「めいめいの整理棚」におさまり（一八頁）、再び「戻ってくる」ことが、目的のように、厚いわが家の壁を、さらに厚くて丈夫なものにするために、その壁の材料を仕入れに出掛けて行く「ための居住空間ということになる（一三頁）。そこではあくまでも現状の都市型の生活が肯定される。そして、家族の生活を支える夫ならば、毎日、周囲の人々に遅れず通勤者の群れへと参入しなければならない。しかし、「ぼく」はそうした生活を放棄すべく、会社を辞めて家を出ていく。それに、小説の結末部では、探偵としての新たな職場をも放棄している。このとき、「ぼく」は「団地」の社会とは無縁な存在だと言える。

「ぼく」が坂道で何度も「立ちどま」り「団地」に入っていけないのは、坂の上の風景を思い出せないという不安のせいだとすることは一応できる。しかし、たとえ戻っていったとしても、人生の目的地とまらない「団地」を前にして、「ぼく」は「立ちどま」らざるを得ない。前節でも触れたように、社会的關係を維持する手段であった「自動車」を失って、自分の足で坂道を歩いているということは、「ぼく」と「団地」生活者との隔絶をより一層はつきりとさせることの現れとも受けとれる。つまり、坂の上の「団地」へと続く「道路」は、現実の社会を放棄した「歩行者」の「ぼく」のために存在していない。

このような経緯をふまえたあと、「ぼく」は「道路」という空間に新たな意味を見出だすようになる。すなわち、「ぼく」にとってそこは「目的地に到達することのない空間」として存在するようになる。このとき、「ぼく」が目的地を目

指すためにのみ存在するとそれまで認識していた「手段としての道路」は、特定の目的地に到達しないという意味で、失踪者にとつての「あらたな出発点」に変貌する。ただし、「道路」を行くその先に目的地を与えないことよつて得られる無目的という快樂は、すでに言及したように、高速道路の体験で証明されていたと言えるので、再確認したと言うべきかもしれない。

坂道の経験を経て、自己の「失踪」願望を次第に自覚するようになった「ぼく」が、最後に、「道路」上の猫の死骸を見つけた様子は、次のように描写される。

無意識のうちに、ぼくはその薄っぺらな猫のために、名前をつけてやろうとし、すると、久しぶりに、贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる。
(二九九頁)

失踪を決意した「ぼく」が猫の死骸を見て「顔をほころばせる」のは、そこに名前など必要とされていない存在、すなわち、社会によつて規定されることのない無名の存在を認識したからにちがいない。「ぼく」は眼前の都市化状況に対応しようとしてはいる。だが、自分の妻のように器用にふるまうことも、波瑠のように家族の絆を深めようとする事もできない。「ぼく」にとつて、社会的関係を維持するための条件は、たとえそれが自分の過去の記憶という精神的なものでも、自己を社会集団に束縛するよう思える。そのため、「ぼく」は過去の自己の社会的条件を温存する記憶と縁を切ろうとして「記憶喪失的状况」に至つたといつてよい。

それは言語のもつ二つの性質、つまり対象の指示と意味の提示との間に亀裂を生じさせることで、意味の社会的属性を決定する体系そのもの、言い換えれば、「ぼく」の属した社会的関係と縁遠くなろうとする行動の結果起きたことだと考えてよからう。こうした「ぼく」の認識に新たな関心を喚起させるのは、存在の属性ではなく存在の存在性である。これは目的をもつた価値集団にとつて意味のない、いわば無名の存在への関心の始まりである。こうした存在が「道路」、あるいは道路上の「猫の死骸」として具現化される。その「轢きつぶされて紙のように薄くなった猫」は「大型トラックまでがよけて通る」とされている(二九九頁)。(ここでトラックさえもが「猫の死骸」を回避するのは、それが道路上の障害物であるためではなく、「道路」という空間に、その存在理由も社会的属性も持たないままに放り出されている物体への

不安から起こる。無名の存在に名を与え、社会的属性を付与することでその存在を集団の秩序へと回収してゆく社会にとっては、無名のままの存在は、忌避すべき存在でしかない。だが、見方を変えれば、忌避されることによって、その存在は社会集団との距離を隔て、存在の場を独自に形成するのである。「猫の死骸」の姿を見るとき、「ぼく」は無名の存在のありように気づいている。そして、そのありようは「ぼく」の心の中で自分の現状とも重なる。そして、社会的な関係を放棄してしまっている「ぼく」の存在の不確かさは、社会に飲み込まれることなく存在する名もなき「猫の死骸」と同様、肯定的に解釈されるようになるのである。

それゆえに、「道路」という空間は「ぼく」にとってはたんに自己の逃亡の欲求を満たすにとどまらず、存在の可能性を引き出す場であることが理解されたのではなからうか。このとき命名するという行為は、存在と存在の関係の成立を媒介する一時的な記号を創出する遊びといった程度のものにすぎない。命名という社会行為の恣意性を知り、ようやく、社会集団を秩序づける基本条件の不確かさを実感した「ぼく」は、命名することに、存在との新たな関係性、あるいは恣意性を押し進めた無為の贅沢さを見出だすのである。

こうした感覚は物事の判別が固定化していた「ぼく」の現実世界の認識をも変えてゆく。つまり、「高速道路の舗装」は、「白だと思えば、白く見え、黒だと思えば、黒にも見え」てくるし(二七二頁)、歩き出した「ぼく」には、波瑠の「顔が黒くなり、髪が白くなり、唇も白くなり、黒目が白くなり、白目が黒くなり、そばかすが白いしみにな^{皮膚の色を指す}」って見えてもくる(二七四頁)。このように、多彩に描写される「白」と「黒」のイメージについては、諸論考においても、指摘がなされている。しかし、この場合は、「白」と「黒」というように別個に存在するのではなく、「失踪者」の認識そのものとして存在すると考えてよからう。「ぼく」という「失踪者」を追うことによって、循環する筋や混交する色の世界を体験させられてゆく読者は、過去の認識(地図)を頼りに生きてきた「ぼく」のなかで、現実を認識するための「図柄」と「地面」の関係が崩壊していることを確認する。それをさらに言い換えれば、読者は「ぼく」の認識における「地」と「図」の関係が完全に消失し、「ぼく」が人生の道しるべを完全に失った結果たどり着いた地点を追っているのである。

五、「蒸発」に関する記事について ― 同時代言語と小説 ―

前節までで、文中に登場する「失踪」「家出」「行方不明」の三語を契機とする本稿の主要な課題の考察は、ひとまず果たされたように思う。その延長上において、この節では、作品に挿入された新聞記事に見られる「蒸発」という語についても考察を加えたい。この語は一度きりの使用だとはいえ、都市生活からの逃亡を意味する点で注目しなければならぬ。というのも、執筆時期の発言において(17)、公房自身は「失踪」をテーマに小説を書くということしか言及していないにもかかわらず、刊行された当時から、この小説が「蒸発人間」の物語としての興味を呼んでいたからである(18)。さらに、刊行されてからかなりの時間が経ったあとでも、たとえば、流行語の事典のなかで、「燃えつきた地団」も「蒸発」した人を追った探偵がまた「蒸発」するストーリー」という説明がなされた(19)。そこで、本節では、なぜこの小説が「蒸発」を主題とした作品として受けとられたのか、それをマスメディアと小説との関係に焦点をあてて考察することとしよう。

この作品において、「蒸発」の記事の切り抜きが掲載されているのは、根室の部下だった田代が、根室に関する手がかりの一つとして、それを探偵(ぼく)に見せる場面である。その記事の内容は、一九五一年(昭和二六)から当年(一九六六年)の間に、搜索願が出てから二五日以上経っても生死の確認されない家出人と、事故等で発見された遺体のうち身元の不明なものの数との合計(蒸発人間)が八六、二五四人に及ぶ、というものである。

田代という青年は、かつて根室洋と一緒の職場にいたので、根室の調査を開始した「ぼく」に積極的に協力しようとする。だが、その善意と思われる行為は、実は根室のためというよりも、むしろ彼自身のためであった。というのも、田代は、失踪人の搜索に対する協力を通して自己の存在の証明を必死に試み、その失敗によって、自殺してしまうからである。彼は自己の存在の希薄さに耐えられずにいた。そのため、既存の人間関係から抜け出していった根室に羨望を抱き、そこから生ずる嫉妬を自らの嘘の発言でもって鎮めてゆこうとしていたのであった。ところが、彼の心理面の危機にまったく縁のない探偵は、無遠慮な発言によって彼を窮地に追い込む。そのために、田代はかろうじて保ってきた現実との接点を失ってゆく。こうして危機感を募らせる彼は、易々と現実から逃亡できた根室を認識するために、「蒸発人間」に関する記事を拠り所とするまでになる。

「ほら、去年の新聞なんですけど、こんな記事が出ていましたよ。」

田代という青年は、厚い眼鏡ごしにぼくを認めるなり、ぼくが席に着くのもどかしげに、破いた新聞の切れ端を差出してみせる。

「どうも分かりにくかったな、君の地図は……」

「行方不明の人間が、八万人以上もいるんですってね。驚いたなあ。根室課長のことも、べつに例外ってわけじゃなかったんだ。」

(二二四頁)

田代は「ぼく」の話を断ち切るようにして、蒸発した八万の人間と根室の家出を結びつけようとする。すなわち、田代が根室の家出を「蒸発」という流行現象の内に読みとろうとする意識は、かみ合うことのない会話の切り出しや、あるいは「この記事を見て刺激されたのかもしれない」と説明することから理解できよう。ただし、彼の性急な説明ぶりは焦っているかのようにも感じられ、田代にとっては、この一枚の切り抜きが根室の「失踪」を解釈する上での、唯一の拠り所になっていると見える。

このように、田代の心理をうかがわせる小道具となったこの切り抜きが、作品中に縮小転写されたものであることについては、既に言及しておいた。しかし、ほかにも新聞記事の引用が本文中に組み込まれているにもかかわらず、これだけが転写の形をとっていることは、注目に値する。この問題に答えるためには、転写されている元の版がいつのものなのかを調査することも意味があろう。

この切り抜きは一九六七年七月一日版の新聞を元にして(20)。これよりも早くから、「家出」は社会的な問題として盛んに取り上げられていたようだ。だが、「蒸発」の語はこの年からマスメディアのなかに定着してきたようである。社会現象を指す「蒸発」の名付け親である藤井重夫氏によれば、氏は同語を一九六三年四月にノンフィクション作品中で用いた(21)。すると、マスコミはこれに素早く反応した。雑誌も同年にはこの著書の内容を「蒸発」事件として紹介することとなったのである(22)。しかし、この語の当初の使用法は、あくまでも個人の失踪事件についての比喩であった。「失踪」や「家出」に代わって、「蒸発」という語が雑誌、あるいは新聞紙上において家出を意味する総称として一般的に使用されるようになったのは、今村昌平氏監督の映画『人間蒸発』の撮影会見が行われた一九六七年三月以後であった(23)。この映画も個人の失踪事件を追うドキュメンタリーではあった。しかし、これ以後「蒸発」という語が社会現象を意味す

る語として広く受け入れられてゆく。新聞の社会面でも、他の雑誌や文芸欄に遅れて同年の七月には使用するようになっていた(24)。

こうした背景をふまえてみれば、小説が刊行された九月には、「蒸発」という言葉は話題としては定着しつつも、社会用語としてはいまだ成熟していなかった時期に当たると推測される。この時期「蒸発」という言葉は、多くその前か後に「人間」をつけるか、括弧にくくられるかして記載された。このことによつて、「蒸発」は科学用語の意味と社会現象の意味との区別がなされていた。しかし、作品世界を一九六七年度の東京に設定した公房が、社会的に流行しはじめていた「蒸発」と、この小説の「失踪」との間に重要な共通点を見出だしていたことは疑い得ないであろう。

ここでふたたび作品世界に戻り、「蒸発」の記事について考えてみよう。小説では、記事の日付が巧妙に削り取られている。それは作品世界(一九六七年二月三日)との整合性を考慮してのことと推測される。つまり、日付のないことで、「ほら、去年の新聞なんですけど、こんな記事が出ていましたよ。」と切り出した田代の発言を活かすことになる。加えてこの日付の削除には、大人たちの「家出」を「蒸発」と呼ぶことがまだ定着していない当時の現状と、作品世界に実現される見慣れた風景とされる「蒸発」との乖離を埋め合わせる働きがあったのではないだろうか。言い換えると、読者世界の日常現象となりつつあった情報内容と、作品世界では既に日常化した事件内容が、新聞という日常的なメディアを介して、重ね合わせられてゆくのである。これには、「失踪」を「蒸発」と呼ぶようになった同時代の関心を小説の内部に組み込むことで、都市の逃亡者を読者の日常生活の問題意識の文脈に組み込ませようとする、公房の意図が感じられる。その意味で、本節の冒頭に挙げた『燃えつきた地獄』に対して生じていた評価は、当然の結果だったと言えるかもしれない。

作品世界の題材となった「失踪者」は、類似語の多用や、「行方不明」者の拡張によつて、錯綜をともなうかたちでたびたび作品世界に現れる。そして、それらの語と出来事とが相互に絡み合い、いつしか作品世界の現実を覆いつくすまでに、「失踪者」の範囲は広がってゆく。これによつて、現実世界と不断に関わる読者の感覚は、「蒸発」世界へと引き込まれる。しかしながら、「蒸発」が新聞記事の中だけに押さえ込まれているということは、社会用語として定着していないかたといふ事実よりも、むしろ「蒸発」と「失踪」とが区別されている必然性を考慮すべきであろう。ここで問われているのは、「蒸発」して消えてしまう人物ではなく、過去の形跡を消しても、やはりどこかに存在する「失踪者」なのである。このような「失踪者」は、社会共同体への帰属を拒む無名の存在、すなわち人間関係に既成の形式や目的を設定せ

ず、つねに他者との流動的な関係の出発点に立とうとする人物といつてよからう。

むすび

『燃えつきた地図』は、「失踪」の前提に始まり、その追跡者の「失踪」に終わる。そして、この「失踪」の主題は、「蒸発人間」「家出少年」と言った当時の社会現象や、団地あるいは自動車といった時代造型と相互に絡み合いながら形成されてゆく。

これは、公房の都市感覚としての「失踪」が、一九六〇年代の都市化と密接に関わっていることを示している。そのため、「失踪」の問題は、たびたび中断される展開や読者に提示されるイメージにとどまらず、新聞記事、地図、略図から喚起される読者の同時代の状況へと拡張されながら、重層的に作品世界を創造する。この場合、明らかに同時代の状況を盛り込みつつも、「蒸発」と言った語を注意深く文章から省いて「失踪」と区別する配慮などに、「失踪三部作」の位置を、あらためて考える必要があると思われる。

こうした作品世界において、「失踪者」は都市から逃亡するために「道路」という空間を選択する。この「道路」が都市における社会集団の合目的性と異なることは、「道路」が「手段」から切り離されてゆく過程からも明らかである。また最終的に「ぼく」が記憶喪失的な状況に陥ることも、他者性の認識が言語にも及ぶ「失踪者」として当然の出来事と言えるであろう。

このように考えるとき、公房にとつての「失踪」は、社会的関係とは無縁となった存在が、その未来の可能性を託して、「道路」という空間に立つまでの過程とも取れる。だとすれば、このことを『砂の女』『他人の顔』も含めて検討した場合どのような意味を持ちうるのかは、考慮すべき問題である。

註

本稿では、一九六七年（昭和四二）九月に講談社から刊行された『燃えつきた地図』をテキストとして使用した。

- (1) 奥山益朗編『現代流行語辞典』(東京堂出版、一九七四年) 一一二頁
- (2) 大岡昇平「文芸時評」『朝日新聞』一九六七年一〇月三二日夕刊
- (3) 篠田一士「綺譚の芸術性について」『すばる』一九七八年四月号、二五六頁
- (4) 前田愛「空間の文学へ——都市と内向の世代」『文学界』一九七九年九月、七九頁
- (5) ウイリアム・カリー著 安西徹雄訳「疎外の構図」(新潮社、一九七五年)
- (6) 鶴田欣也著「芥川・川端・三島・安部——現代日本文学作品論」(桜楓社、一九八三年)
- (7) 中山眞彦「解体する風景にひとつの地平が現れる——安部公房の長編小説とフランス語訳について」(下)——『東京女子大学紀要』一九九四年九月
- (8) 民法第三〇条「失踪宣告」および第三二条「失踪宣告の効果」参照
- (9) 中山、前掲論文参照
- (10) 鶴田、前掲論文参照
- (11) 前田、前掲論文、引用は一九六頁
- (12) 東京都『東京都百年史別巻・年表索引』(きょうせい、一九八〇年) 一一三〇頁
- (13) 新潮社編『新潮日本文学アルバム安部公房』(新潮社、一九九四年) 七八—九九頁
- (14) 東京都『東京百年史』(6)『きょうせい、一九七九年』四〇八—九九頁、府中市『府中市史』(府中市、一九七四年) 八九九頁
- (15) 人文社編『日本都市地図全集第三集』(人文社、一九六二年) 22東京都府中市
- (16) 安部公房「新日本名所案内63多摩丘陵」(『週刊朝日』一九六五年七月九日号)
- (17) 安部公房「都市について」(『新潮』一九六七年一月)
- (18) 遠藤周作共著『蒸発人間』(一九六七年 新潮社) 九頁
- (19) 奥山、前掲書一一二頁
- (20) 『朝日新聞』一九六七年七月一五日朝刊社会面
- (21) 藤井重夫「失踪宣告——ある校長の場合」(『文芸春秋』一九六九年七月)
- (22) 「北海の町に起った『人間蒸発』事件」(『週刊朝日』一九六三年五月二四日号)
- (23) 『朝日新聞』一九六七年三月二八日夕刊、「毎日新聞」一九六七年三月二八日夕刊など
- (24) 「働き手200人が『蒸発』」(『毎日新聞』一九六七年七月一日朝刊)、「抗議の『蒸発』」(『朝日新聞』一九六七年七月二二日朝刊)、「『蒸発校長』現れる」(『毎日新聞』一九六七年七月一七日朝刊) など